

## 園の実践事例紹介～「科学する心」を育てる～

### 社会福祉法人春風会 なかいず認定こども園（静岡県）

自園の地域の特色を生かした恒例行事はありますか？

なかいず認定こども園では、毎年、地域の民生組合や漁業組合が計画する年長児を対象の「鮎の放流体験」の恒例行事がありました。しかし今年は『鮎の放流ではなく、アマゴの放流体験でもいいか』との提案を受けたことで、子ども達の「なぜだろう・どうなるのかな」が生かせる行事へと変化する事例をご紹介します。

#### ● アマゴの放流体験から生まれる「科学する心」

##### ✦ 大見川ってどんな川？ 5歳児 4月から6月

アマゴなどが載っている図鑑や絵本を用意すると、子ども達はアマゴの様子を絵に描いたり、どんな魚かを調べたりした。放流する予定の川の様子から「（川の中に）石がいっぱいある」「アマゴは何を食べているのかな」「アマゴの大きさはどれぐらいかな」などのつぶやきが聞かれ、発見が生まれた。

下見した「大見川」のイメージを放流の日までに心に留めておくため制作活動として、模造紙を用意すると、川の様子を話し合いながら、川底の色を工夫し、水の流れがわかるような塗り方をしていった。立体的にするため川の中の岩は別の紙を丸めて作り置く姿も見られた。水面の輝きをラップで表そうとしたA児は、うまくいかなかったラップを見て「水がぶつかりあって泡立っているところみたいに見える」と新たな気づきを得た。下見の時には、言葉として出なかった観察事実も制作活動を通して再現できた。



放流する川の様子を観察する



川の様子を表現していく

##### ✦ アマゴを放流してみよう 5歳児

放流当日、沢山の地域のみなさんが見守っている中で、アマゴの稚魚を放流した。バケツを傾けて少しずつ放流していく子もいれば、数匹をつかんでアマゴの魚体の感触を確認しながら放流していく姿も見られた。どの子も放流した稚魚の行方を見つめていた。

放流後には「アマゴは何を食べていますか」「アマゴは海に行ったら戻ってきますか」「アマゴはいつおとなになるんですか」など図鑑に載っていないことが気になった子が質問した。調べたことで分かった「問い」の答えを、専門家に聞いて確かめ（やっぱりそうなんだ）確信していく様子が見られた。



アマゴを放流する

後日、自分たちで制作した「大見川」へもう一度アマゴの放流をするためにアマゴを制作した。見たままの稚魚を作る子もいれば、図鑑で調べた成魚を作っている子もいた。「大きな石の下や陰に隠れているんだよ」など会話しながら作ったアマゴを放流していた。



自分なりのアマゴを作る

—保護者との共有—

完成した「大見川の様子」は園玄関にしばらく展示した。お迎えにきた保護者に説明したり、年中児や年少児が興味深く見たりする姿もあった。



完成した大見川の様子

## ✦ 大見川をつくって水を流そう 5歳児 6月

砂場遊びをしていたD児が「大見川をつくって水を流そう」と声をあげた。これまで川をつくることはあったが「大見川」という川の名前が出たことや、実際の大きな川を見た経験から、つくる川の規模がこれまでと異なっていた。「たくさん水を流しても、すぐなくなっちゃう。なんでだろう」などの気づきから、「（模造紙の大見川と同じように）ラップを敷けばいいんだよ」「ビニールを上手につなぐにはどうしたらいいかな」とビニールを組み合わせて高低差に気をつけながら水を流していた。



水が流れるようにビニールを敷く

### 保育者の読みとり

地元の川であってもなかなかそこで遊んだり、じっくり観察したりする機会はないのが現状であるが、アマゴの放流体験の一連の流れを経験し考えながら、「科学する心」をもって大見川を見直すことができた。また、「大見川」作りでは、砂へ水を流すことを通して砂には水が染み込んでしまい上手く流れないことに気づいたのをきっかけにして次々に「問い」や「発想」がうまれた。これまでの経験をいかして、ビニールと組み合わせて高低差に気をつけながら水を流すという活動へ発展していった。新たな分野で「科学する心」を育むことに繋がっていたと考えられる。

### 活動の深まり

運動会の遊戯の中でも「大見川を表現したい」という子ども達の声を拾った保育教諭が、子ども達と共に「元気いっぱい なかはずっ子～青と夏～」と題した川の流れをモチーフにした遊戯を創作した。また、塩焼き体験は、川魚の食べ方の留意点を専門家にアドバイスいただいたりしながら、給食室の栄養士さんの協力を得て10月に実施。放流した稚魚が一年たつとこのぐらいの大きさに育つというサイズのアマゴを養魚場から仕入れて、実際に食べる経験ができた。



実際にアマゴを食べる